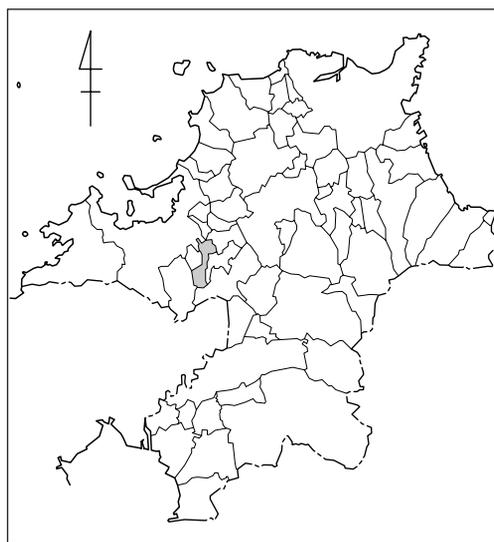


むら した 村 下 遺 跡 6

—E・G地点の調査—

大野城市文化財調査報告書 第172集



2019

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は、福岡平野南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた緑豊かな街です。市域には、大野城跡のほか、水城・牛頸須恵器窯跡の国指定史跡をはじめ、多くの歴史遺産があります。

今回ご報告するE地点は平成8年度・G地点は平成13年度に調査を実施しました。E地点からは、弥生時代の溝や土坑が検出されています。G地点からは、弥生時代～中世にかけての溝跡や土坑などが検出されました。中でも、中国銭の出土が注目されます。

本書が市民の皆様をはじめ多くの方々の文化財保護に対する理解と認識を深める一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり多大なるご理解・協力いただきました地権者ならびに地域住民に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成31年3月29日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

1. 本書は、大野城市筒井2丁目490-1に所在する村下遺跡E地点、大野城市筒井1丁目746-1、747-2に所在する村下遺跡G地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、事務所建設及び共同住宅に伴う事前調査として実施されたもので、発掘調査は市と事業者で50%負担し、報告書作成に至る費用は、市が負担した。
3. 調査は大野城市教育委員会のE地点は石木秀啓、G地点は林潤也が実施した。
4. 整理報告は柴田剛が担当した。
5. 発掘調査は、E地点は平成8年5月7日～平成8年5月29日、G地点は平成13年7月17日～平成13年8月16日まで行った。
6. 整理調査・報告書作成は平成30年6月1日～平成31年3月29日まで、大野城市心のふるさと館（3階）で実施した。
7. 本書に使用する遺構実測図は石木、高木芽子、大海雅子、林、吉田香織、三原ひろみ、藤田和子が行い、遺物実測は小嶋のり子、柴田が作成した。拓本は小嶋が行った。デジタルトレースは吉田薫、山元瞭平、柴田が作成した。
8. 本書で使用する写真は現場の遺構写真を各担当者、遺物写真を写測エンジニアリング株式会社に委託した。
9. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。
10. 本書の掲載遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会が保管・管理している。
11. 本書に使用する土色名『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用した。
12. 本書における遺構の分類記号は、SD：溝 SK：土坑 SX：不明遺構 SP：柱穴ないし杭等による小穴
13. 本書は石木、林協力のもとに執筆と編集は柴田が行った。

本文目次

第I章. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
第II章. 位置と環境	
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
第III章. —E地点—	
1. 調査概要	7
2. 遺構と遺物	7
3. 小結	13
第IV章. —G地点—	
1. 調査概要	14
2. 遺構と遺物	14
3. 小結	19
第V章. まとめ	
1. E地点の並列溝について	20

表目次

表1 村下遺跡調査一覧表	3
表2 E・G地点出土遺物観察表	23
表3 E・G地点遺構総覧表	24

図版目次

図版1 ①E地点調査区北側全景（南東から）②E地点調査区北側全景（北東から）	
図版2 ①E地点SD01完掘（南東から） ②E地点SD02完掘（南東から） ③E地点SX08完掘（南から）	

- 図版3 ①G地点調査区全景（南東から） ②G地点調査区全景（北西から）
 図版4 ①G地点S X01完掘（南東から） ②G地点S X01銭貨出土状況（南東から）
 ③G地点S D01・S D03完掘（南東から）
 図版5 出土遺物①
 図版6 出土遺物②

挿 図 目 次

第1図	村下遺跡A～M調査地点位置図（1/5,000）	3
第2図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	6
第3図	E地点遺構略測図（1/200）	7
第4図	E地点遺構配置図（1/100）	8
第5図	E地点S D01土層断面図（1/20）	9
第6図	E地点S D02・S X08土層断面図（1/20）	9
第7図	E地点S D03土層断面図（1/20）	10
第8図	E地点出土遺物実測図（1/3）	12
第9図	G地点遺構略測図（1/200）	14
第10図	G地点遺構配置図（1/100）	15
第11図	G地点S X01実測図（1/40）	16
第12図	G地点S X01出土銭貨拓本（原寸）	17
第13図	G地点S X06・その他の出土遺物実測図（1/3）	17
第14図	調査区壁面層序A～E地点（1/40）	18
第15図	E地点・M地点位置関係図（1/400）	22

第Ⅰ章. はじめに

1. 調査に至る経緯

大野城市では、昭和54年度（1979）から本格的に埋蔵文化財調査を実施しているところですが、報告書刊行が遅滞している場合が少なくありません。主な理由として、1回の調査面積が狭いことから周辺の発掘調査の回数を重ねた段階で報告を考えていたもの、その他の遺跡の発掘調査を優先しなければならないことから整理調査が遅れたもの、予算の不足等があります。今回報告するものもそのような遺跡の調査で、発掘調査時よりもだいぶ時間が経ってしまいましたが、小規模な調査であり、同時に報告するものである。いずれも周知の埋蔵文化財包蔵地『村下遺跡』に該当します。村下遺跡—A地点—が昭和62年に開始されて以来、村下遺跡—M地点—まで13回の発掘調査が実施されています。

今回報告するE地点は、平成8年度に大野城市筒井2丁目490—1で事務所建設の計画がなされ、その後、試掘調査を実施した結果、遺構が確認されました。計画通り開発が実施されると遺跡が破壊されるため、事業者との協議の結果、遺構保護は設計上困難であることから、当初計画通り事務所建設が行われることとなり、遺跡が破壊される部分の発掘調査が必要と判断された。調査期間は平成8年5月7日～平成8年5月29日まで実施し、調査面積は約300㎡を調査対象とした。

G地点は、平成13年度に大野城市筒井1丁目746—1、747—2で集合住宅建設の計画がなされ、その後、試掘調査を実施した結果、遺構が確認されました。計画通り開発が実施されると遺跡が破壊されるため、事業者との協議の結果、遺構保護は設計上困難であることから、当初計画通り集合住宅建設が行われることとなり、遺跡が破壊される部分の発掘調査が必要と判断された。調査期間は平成13年7月17日～平成13年8月16日まで実施し、調査面積は約155㎡を調査対象とした。

2. 調査体制

発掘調査は前述のように平成8年度・平成13年度に行ったが、報告書作成は平成30年度に実施した。報告書刊行時の平成30年大野城市教育委員会の体制は以下のとおりである。

平成30度

教育長	吉富 修
教育部長	平田 哲也
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	徳本 洋一 林 潤也 佐藤 智郁
主任技師	上田 龍児
技師	山元 瞭平

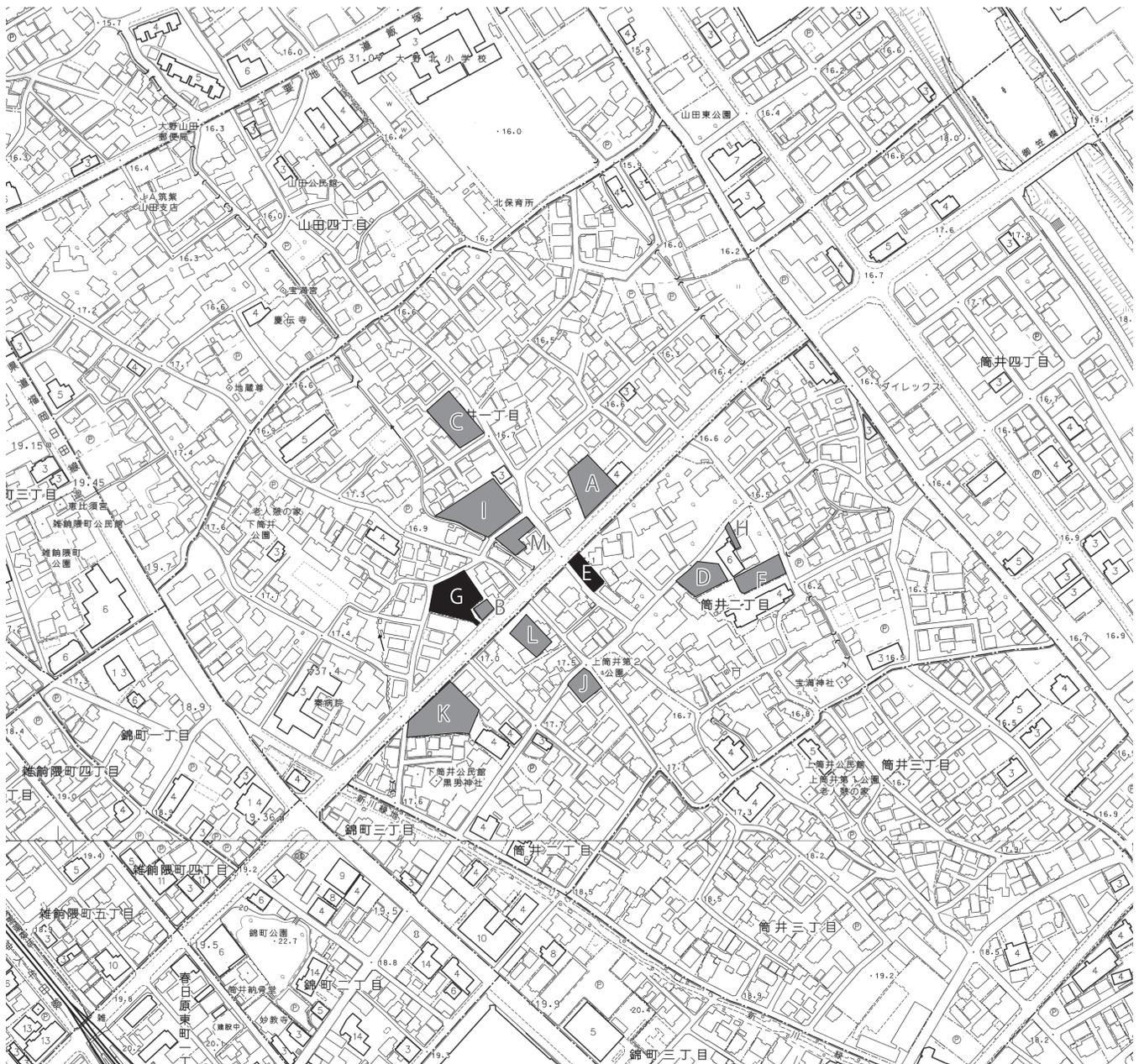
主事（任期付）	坂井 貴志（平成30年8月まで） 鮫島 由佳
主事（任期付）	柴田 剛（整理担当）
嘱託（調査）	澤田 康夫 三浦 萌（平成30年4月～9月まで）
嘱託（啓発）	山村 智子 浅井 毬菜（平成30年5月～）
嘱託（庶務）	呉羽 京子 西村 友美

発掘参加者

地元有志

整理作業参加者

松岡 信子 町井 裕子 村山 律子 白井 典子 仲村 美幸 松本 友里江 津田 りえ
吉田 薫 小嶋 のり子



第1図 村下遺跡A～M調査地点位置図 (1/5,000)

地点名	調査回数	調査年月	報告書作成刊行
A地点	1	1987 (S62) 4～5	大野城市文化財調査報告書第88集
B地点	2	1990 (H2) 7	大野城市文化財調査報告書第88集
C地点	3	1992 (H4) 7～9	大野城市文化財調査報告書第91集
D地点	4	1995 (H7) 4～5	今後、刊行予定
E地点	5	1996 (H8) 5	大野城市文化財調査報告書第172集
F地点	6	2000 (H12) 11～2001 (H13) 1	今後、刊行予定
G地点	7	2001 (H13) 7～8	大野城市文化財調査報告書第172集
H地点	8	2002 (H14) 4～6	今後、刊行予定
I地点	9	2005 (H17) 1～2	今後、刊行予定
J地点	10	2008 (H20) 12	今後、刊行予定
K地点	11	2014 (H26) 4～5	大野城市文化財調査報告書第141集
L地点	12	2016 (H28) 9～10	大野城市文化財調査報告書第165集
M地点	13	2016 (H28) 12～2017 (H29) 3	大野城市文化財調査報告書第161集

表1 村下遺跡調査一覧表

第Ⅱ章. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市が位置する福岡平野は、東南部に位置する。市域は南北に細長く、中央部が挟まった瓢箪形の市域をなす。北部から中央部には筑後川から分かれた御笠川が南東から北西に流れて博多湾へと注ぐ。この御笠川流域には平野部が形成され、多くの遺跡の所在が確認されている。

東部には特別史跡「大野城跡」が立地する四王寺山、南部の牛頸山周辺には多くの須恵器窯跡の所在が確認されて、団地造成等の開発により多くの発掘調査も実施され、現在では九州最大の牛頸窯跡群として周知されている。

2. 歴史的環境

村下遺跡は、平成30年度現在まで、13ヶ所（A～M地点）の発掘調査が実施され、その結果、弥生～江戸時代までの複合遺跡であることが明らかになっている。中心は弥生時代である。

以下、主要な周辺遺跡を時代ごとに概観する。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、大城山から東に派生するなだらかな丘陵上の乙金山山麓に位置する釜蓋原遺跡からナイフ形石器・細石刃などが出土している。

縄文時代

縄文時代では、石勺遺跡（F地点・G地点・K地点）が該当する。早期（稲荷山式・早水台式・ヤトコロ式）や後期～晩期（太郎迫式・広田式・三万田式）の出土遺物や遺構では落とし穴状遺構が確認されている。

弥生時代

弥生時代になると市域北部の丘陵部と御笠川周辺の平野部を中心に遺跡が展開する。まず、弥生時代前期の集落では、方形や袋状堅穴が川原遺跡から確認されている。前期の墓地は、土坑墓や甕棺墓が検出された御陵前ノ椽遺跡が該当する。

中期初頭～後期前半の集落跡である仲島遺跡から堅穴住居跡・掘立柱建物・土坑・溝等が検出された。注目すべき資料として、出土遺物の中から中国「新」代の貨布が挙げられる。その他、青銅製鋤先、銅矛鑄型片・鏡片・銅鏃などの多くの青銅製品が出土している。このような出土遺物含め拠点集落と考えられている。また、森園遺跡から堅穴住居跡・祭祀溝、墓域から甕棺墓・石棺墓・木棺墓・土坑墓が確認されている。銅矛とみられる鑄型の出土も注目すべき資料である。

古墳時代

古墳時代になると、政治的記念物である前方後円墳の造営が開始される。市内では、前方後円墳の造営は未だ確認されていないが、御陵古墳群から出土したといわれる三角縁神獸鏡が有力な在り

勢力の存在を窺わせる。5世紀前半代になると三角板革綴短甲・三角板革綴衝角付冑・壺型埴輪等が出土した笹原古墳が大城山からのびる小丘陵上に築かれる。また、6世紀後半～月隈丘陵から乙金山、四王寺山にかけての丘陵上に小規模な円墳を主体とした群集墳が、丘陵上地を中心に爆発的に増加する。乙金北古墳群・持田ヶ浦古墳群・善一田古墳群などが該当する。集落遺跡では、中・寺尾遺跡から竪穴住居跡、瑞穂遺跡では掘立柱建物・井戸・土坑など検出されている。生産遺跡では、乙金地区において6世紀後半～7世紀初頭を中心に乙金窯跡、雉子ヶ尾窯跡などが操業する。

古代

奈良時代になると、白村江の戦いで大敗した天智天皇は、博多湾からの侵攻に備え内陸部に防御ラインとして外濠と土塁からなる水城を築いている。『日本書記』天智3年(664)の一節に「大堤を築きて水を貯へしむ。名づけて水城という」という記事が物語る。また、大野城市の地名の起源となった「大野城」も同様に『日本書記』天智4年(665)に築かれており、最古の朝鮮式山城として有事の際の籠城として戦う構造となっている。このような白村江の敗戦以後の国際的な緊張感の高まり背景が大宰府の地を護るよう配置された、水城や大野城などの防衛施設が構築された要因である。

律令国家の成立とともに大宰府から水城の東門・西門を通過して官道が整備された。市内調査においては西門ルートが谷川遺跡・池田遺跡では、官道およびその側溝とみられる遺構が確認されている。東門ルートについては、隣接する福岡市の所在する井相田C遺跡や那珂久平遺跡などで道路状遺構が確認されている。市内においては、御笠の森遺跡を横断するように想定されている。石勺遺跡J地点では、奈良時代の火葬墓などが検出されている。

中世・近世

鎌倉時代～戦国時代の遺跡として、御笠の森遺跡が該当する。近世初頭には方形区画を有する溝が展開し、17世紀代には埋没、集落は終焉を迎えている。この遺跡は「筑前国続風土記拾遺」に記載されている「山田村」に比定されている。

近世になると、近世白木原村の一集落「本村」に比定されている、後原遺跡が注目される。調査結果から近世村落の景観を復元する上で興味深い成果を得ている。市内には多くの遺跡が眠っており、今後の調査によってさらなる類例の増加が見込まれる。今回報告する村下遺跡が所在する筒井地区は、住宅街と変化している。

【参考文献】

『大野城市史 上巻』大野城市史編さん委員会 2005

『村下遺跡4』—L地点の調査—大野城市文化財調査報告書第165集 大野城市教育委員会2018

『村下遺跡5』—M地点の調査—大野城市文化財調査報告書第161集 大野城市教育委員会2018



- | | | | | |
|----------------|-----------------|-------------|-------------|------------------|
| 1. 金隈遺跡 | 16. 御笠の森遺跡 | 31. 原口遺跡 | 46. 原田遺跡 | 61. 原ノ畑遺跡 |
| 2. 堤ヶ浦古墳群 | 17. ヒケシマ遺跡 | 32. 此岡古墳群 | 47. 金山遺跡 | 62. 成屋形古墳 |
| 3. 持田ヶ浦古墳群 E 群 | 18. 中・寺尾遺跡 | 33. 京塚遺跡 | 48. 金山古墳 | 63. 成屋形遺跡 |
| 4. 持田ヶ浦古墳群 B 群 | 19. 森園遺跡 | 34. 錦町遺跡 | 49. 金ヶ浦遺跡 | 64. 裏ノ田窯跡 |
| 5. 持田ヶ浦古墳群 D 群 | 20. 松葉園遺跡 | 35. 榎町遺跡 | 50. 釜蓋原古墳群 | 65. 裏ノ田遺跡 |
| 6. 持田ヶ浦古墳群 F 群 | 21. 善一田古墳群 | 36. ウド遺跡 | 51. 深町古墳 | 66. 裏ノ田古墳 |
| 7. 御陵脇遺跡 | 22. 王城山古墳群 | 37. ウド古墳 | 52. 笹原古墳 | 67. 春日公園内遺跡 |
| 8. 塚口遺跡 | 23. 乙金北古墳群 | 38. 銀山遺跡 | 53. 曲り目遺跡 | 68. 後原遺跡 |
| 9. 御陵古墳群 | 24. 御手洗遺跡 | 39. 雉子ヶ尾遺跡Ⅲ | 54. 釜蓋原遺跡 | 69. 前野原遺跡 |
| 10. 御陵前ノ椽遺跡 | 25. 花園遺跡 | 40. 雉子ヶ尾古墳群 | 55. 駿河 A 遺跡 | 70. 九大筑紫キャンパス遺跡群 |
| 11. 唐山遺跡 | 26. 古野遺跡 | 41. 雉子ヶ尾遺跡Ⅱ | 56. 駿河 E 遺跡 | 71. ハザコ遺跡 |
| 12. 仲島遺跡 | 27. 宝松遺跡 | 42. 雉子ヶ尾遺跡 | 57. 駿河 B 遺跡 | 72. 陣の尾遺跡 |
| 13. 井相田 C 遺跡群 | 28. 雑餉隈遺跡 | 43. 駿河 D 遺跡 | 58. 原ノ口遺跡 | |
| 14. 川原遺跡 | 29. 村下遺跡 | 44. 駿河 C 地点 | 59. 瑞穂遺跡 | |
| 15. 井相田 B 遺跡群 | 30. 薬師の森遺跡 | 45. 石勺遺跡 | 60. 国分田遺跡 | |

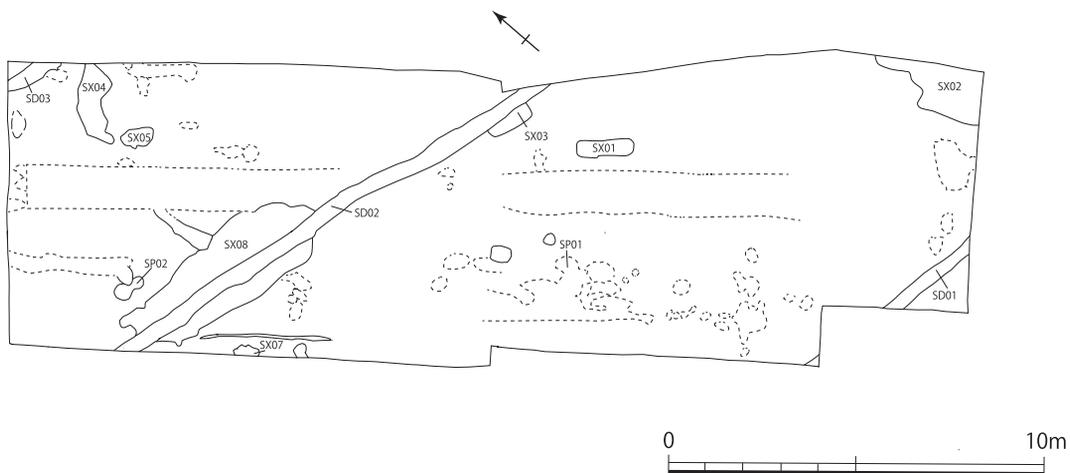
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第Ⅲ章. —E地点—

1. 調査概要

当遺跡は大野城市筒井2丁目490-1に所在する。標高16.5m前後の御笠川西岸の沖積微高地に立地している。調査地は宅地にあたり、事務所建設に伴う発掘調査で、調査面積は約300m²である。本調査は石木が担当し、平成8年5月7日より表土除去を開始し、遺構検出、遺構掘削、写真撮影、測量等を実施し、平成8年5月29日に現地の埋め戻しをもって終了した。

本調査で検出した遺構は溝3条、不明遺構8基、ピット等を確認した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器などが出土した。



第3図 E地点遺構略測図 (1/200)

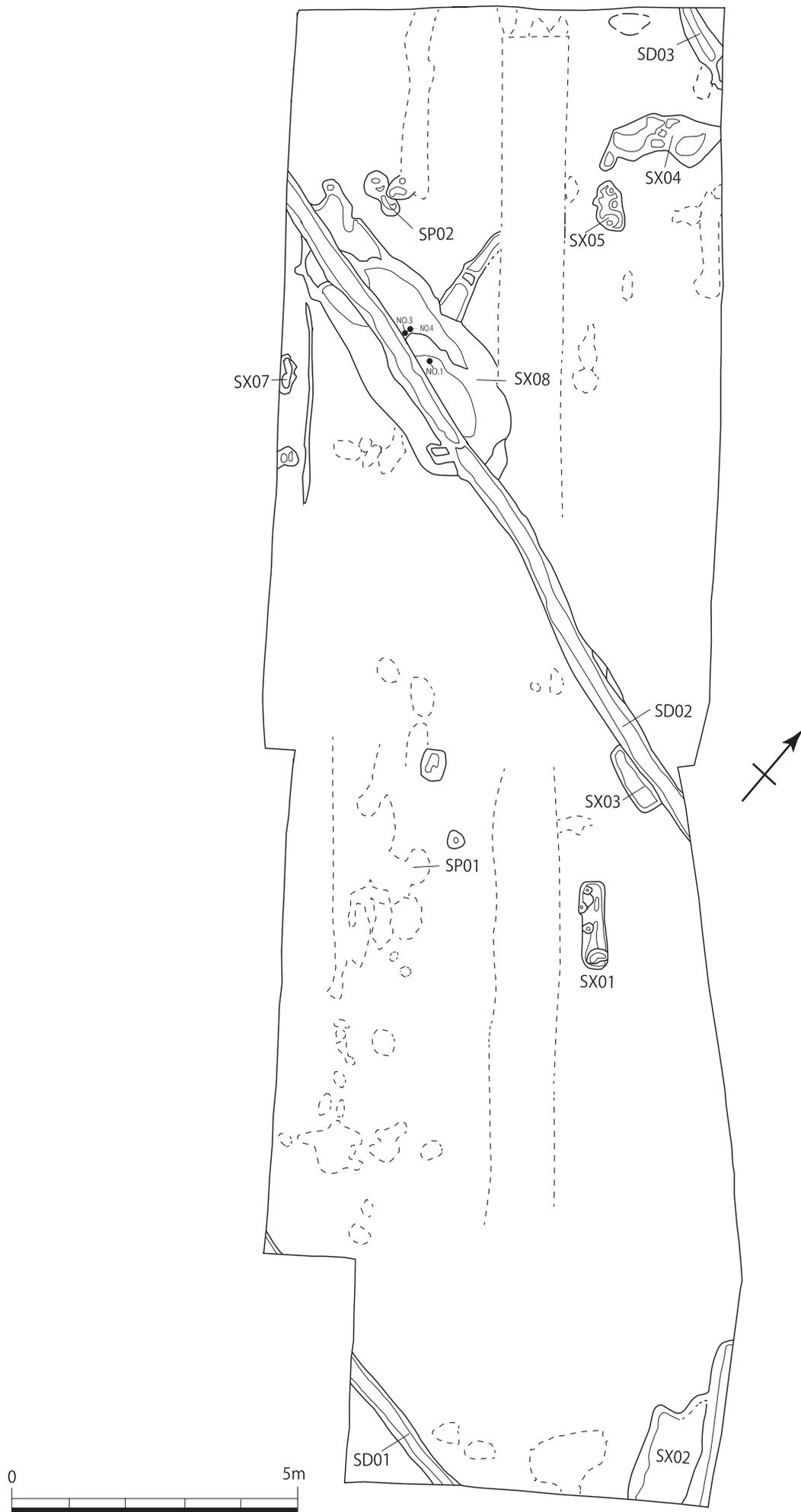
2. 遺構と遺物

(1) 溝跡

SD01 (第3～5図、図版1、2)

調査区の南西隅に位置する。検出長約5.50m 幅約0.30～0.35m、深さ0.12～0.16mを測る。溝は、黒褐色～褐色系の埋土で覆われ、断面形状は逆台形状を呈している。溝底面は、若干の凹凸は認められるものの、ほぼフラットに近い。この溝は、直線的に延びており、SD02・SD03と並行すると思われる。

出土遺物は、皆無である。

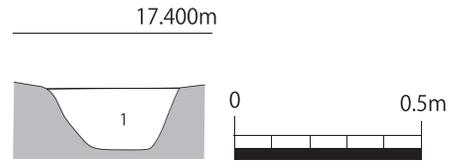


第4図 E地点遺構配置図 (1/100)

SD02 (第3、4、6図、図版1、2)

調査区の中央からやや北側に位置する。検出長約13.30m 幅約0.35～0.52m、深さ0.12～0.16mを測る。特徴として、SX08付近で溝が一度途切れ、若干の段差が認められる。溝は、主に黒褐色～褐色系の埋土で覆われ断面形状は箱形状を呈している。溝底面のレベルは、南東にむかってゆるやかに深くなっている。この溝は、直線的に延びており、SD01・SD03と並行すると思われる。

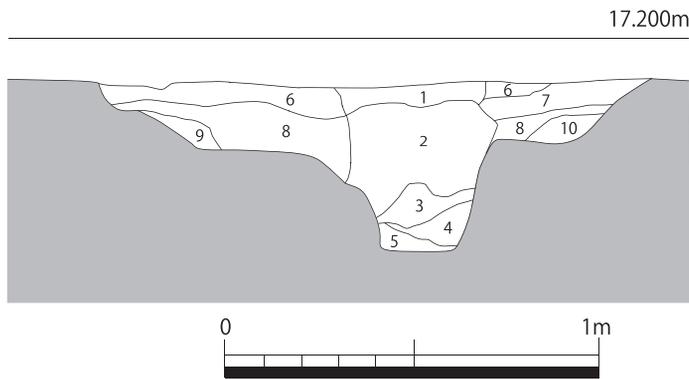
出土遺物は、弥生土器（丹塗含む）・土師器である。



SD01土層

1. 黒褐色土 10YR2/3 に褐色 (7.5YR4/6、10YR4/6) が混じる。

第5図 E地点SD01土層断面図 (1/20)



SD02・SX08土層 1～5:SD02 6～10: SX08

1. 暗赤褐色土 5YR3/3粘質がある。
2. 黒褐色土7.5YR2/2しまり有り、硬い。
3. 灰色土10Y4/1しまり有り、硬い。粘質つよい。2よりさらに強い。
4. 黒褐色土10YR3/2しまり有り、硬い。粘質つよい。
5. 暗褐色土10YR3/3しまり有り、硬い。粘質あまりない。
6. 極暗赤褐色土2.5YR2/37. 暗褐色土
7. 暗赤褐色土5YR3/3しまり有り、硬い。粘性強い。
8. 暗褐色土10YR3/3しまり有り、硬い。白色砂混じる。
9. 黒褐色土5YR2/2しまり有り、硬い。
10. 極赤褐色土7.5YR2/3しまり有り、硬い。

第6図 E地点SD02・SX08土層断面図 (1/20)

出土遺物 (第8図、図版5)

出土遺物の取り上げについては、上層（褐色土）・下層（黒色土）・下層と細分して取り上げている。

弥生土器

甕（1）上層（褐色土）より出土した口縁部の資料である。口縁部は「く」字状を呈すると思われる。内外面は磨滅が著しいため、調整不明である。

甕（2）上層（褐色土）より出土した口縁部の資料である。口縁部は「逆L」字状を呈する。外面の一部にナデ、内面は磨滅が著しいため、調整不明である。

甕（3）上層（褐色土）より出土した口縁部の資料である。口縁部は「く」字状を呈する。内外面は磨滅が著しいため、調整不明である。

甕（4）上層（褐色土）より出土した口縁部の資料である。口縁部は「逆L」字状を呈する。内外面は磨滅が著しいが、ナデ調整と思われる。

壺（5）上層（褐色土）より出土した胴部の資料である。外面には1条の突帯と丹塗が施される。内面は磨滅のため調整不明である。

鉢（6）上層（褐色土）より出土した口縁部の資料である。口縁部はやや直立気味に立ち上がり、

内面は横ナデ、外面は磨滅のため調整不明である。

土師器

甕（7）上層（褐色土）より出土した口縁部の資料である。口縁端部は平坦面を作り、内面はナデと思われる。外面は磨滅のため調整不明である。

弥生土器

甕（8）下層より出土した底部の資料である。外面は刷毛目、内面は磨滅のため調整不明である。

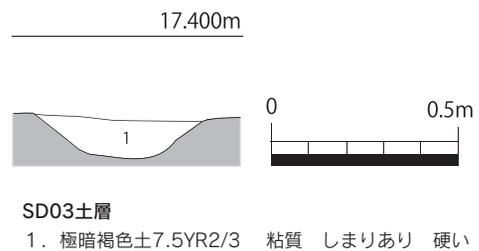
壺（9）下層より出土した底部の資料である。内外面は磨滅が著しいため、調整不明である。

蓋（10）下層（黒色土）より出土した蓋の資料である。外面は刷毛目が僅かに残る。内面は磨滅のため調整不明な部分もあるが、ナデ調整と思われる。

SD03（第3、4、7図、図版1）

調査区の北側に位置する。検出長約5.50m、幅0.30～0.35m、深さ0.12～0.16mを測る。溝は、黒褐色～褐色系の埋土で覆われ、断面形状は逆台形状を呈している。溝底面のレベルは、南東にむかってゆるやかに深くなっている。この溝は、直線的に延びており、SD02・SD03と並行すると思われる。

出土遺物は、皆無である。



第7図 E地点SD03土層断面図（1/20）

（2）不明遺構

SX03（第3、4図、図版1）

調査区の中央よりやや東に位置し、SD02に切られる。検出長1.33m 幅0.31～0.42m、深さ0.03～0.14m前後を測る。遺構は、褐色系の埋土で覆われ、断面形状は逆台形状を呈している。

出土遺物は、弥生土器・土師器である。

出土遺物（第8図）

弥生土器

甕（11）埋土中から出土した底部の資料である。外面は刷毛目、内面は磨滅のため調整不明である。

SX05（第3、4図、図版1）

調査区の北側より位置する。検出長約0.83m 幅0.40～0.50m、深さ0.12～0.21mを測る。遺構は、褐色系の埋土で覆われている。溝底面には、Pit状の凹凸がある。

出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器である。

出土遺物（第8図）

須恵器

蓋（12）埋土中から出土した蓋の資料である。口縁端部は三角を呈するもので、内外面は回転ナデ調整である。

SX08 (第3、4、6図、図版1、2)

調査の北側に位置し、SD02に切られる。長軸6.35m×短軸1.82m、深さ最大0.47mを測る。遺構は、暗黒褐色～黒褐色系の埋土で覆われ、断面形状は逆台形状を呈している。

出土遺物は弥生土器(丹塗)・土師器である。

出土遺物(第8図、図版5、6)

出土遺物の取り上げについては、番号記載、上層と細分して取り上げている。

弥生土器

甕(13) 上層より出土した底部の資料である。外面は刷毛目、内面は煤が付着する。

甕(14) 上層より出土した底部の資料である。内面は、ナデ。外面は刷毛目が残る。壺の可能性もある。

甕(15) 上層より出土した口縁部の資料である。口縁部は「く」字状を呈する。外面は刷毛目、煤が一部付着する。内面は磨滅が著しいため、調整不明である。

甕(16) 上層より出土した口縁部の資料である。口縁部は「鋤先形」状を呈する。口縁部は横ナデ、外面は刷毛目が施される。内面は磨滅が著しいため、調整不明である。

甕(17) N0. 3として取り上げた口縁部の資料である。口縁部は「く」字状を呈する。内外面は磨滅が著しいため、調整不明である。端部面に刻目が確認できる。

壺(18) 上層より出土した胴部資料である。丸みのある体部で外面には刷毛目、内面に指オサエ調整が残る。小形壺。

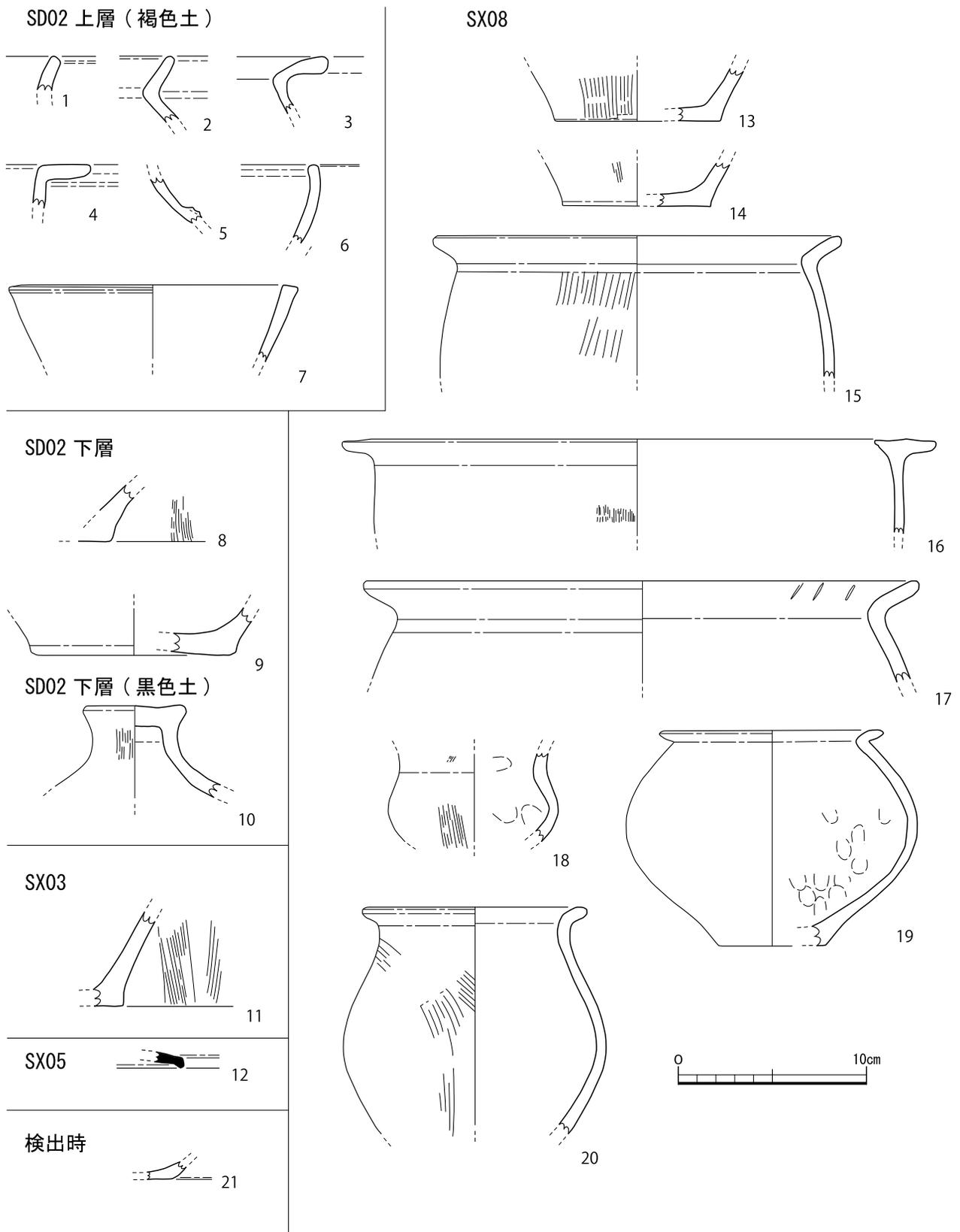
壺(19) N0. 1として取り上げた口縁部～底部付近にかけての資料である。剥離部分もあるが、口縁部～外面に丹塗りが施される。内面は指オサエ後、ナデ調整が残る。小形の無頸壺。

壺(20) N0. 4として取り上げた口縁部～底部付近の資料である。外面は不定方向の刷毛目、内面はナデ調整が施される。また、内面には剥離部分もあるが、丹塗りが観察できる。

(3) 遺構検出時(第8図)

土師器

小皿(21) 遺構検出時から出土した口縁部～底部の資料である。内外面は磨滅のため調整不明である。



第8図 E地点出土遺物実測図 (1/3)

3. 小結

今回の調査で判明した所見は以下のとおりである。

遺構の主体は溝や不明遺構・Pitである。御笠川左岸の沖積地に弥生時代中期後半以降に遺構が形成されだしたことが判明した。不明遺構の大半は、いずれも人為的な掘り込みとは判断しがたい状況であった。不定形の形状も多く、底面には凹凸が認められるなど、自然の落ち込みや窪みなどに遺物が混入したと考える。

特記すべき遺構ではSD01・SD02・SD03の3条が並列して確認されている。この3条の溝は直線的に伸びていることから意図的な溝と考えられる。平成28年度調査を実施した村下遺跡—M地点—においても並列する2条の溝を確認している。両遺跡は道路を挟んで隣接する位置関係にある。詳細は「V章. まとめ」で述べる。

今後周辺の調査事例を含め、村下遺跡全体の自然環境や土地利用など意識的な調査が必要であろう。

【参考文献】

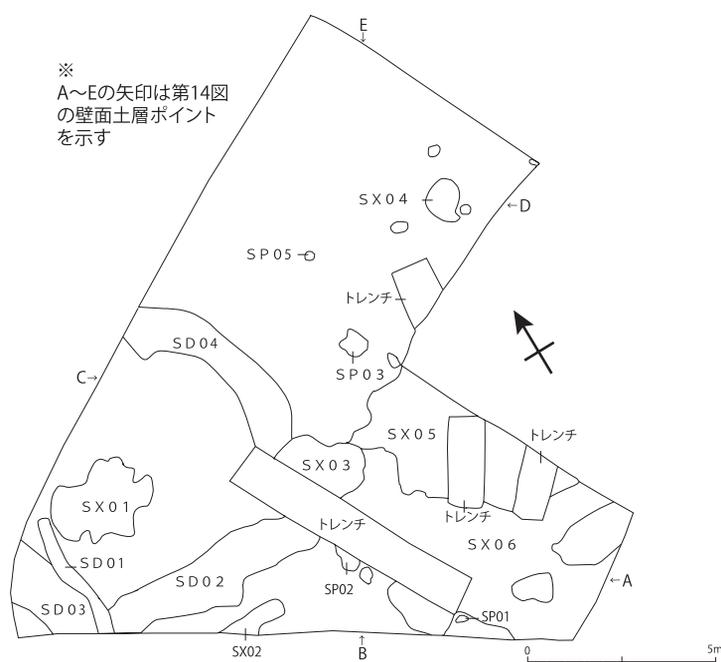
- 『村下遺跡Ⅰ』—A地点・B地点の調査—大野城市文化財調査報告書第88集 大野城市教育委員会2009
- 『村下遺跡Ⅱ』—C地点の調査—大野城市文化財調査報告書第91集 大野城市教育委員会2010
- 『村下遺跡Ⅲ』—K地点調査—大野城市文化財調査報告書第141集 大野城市教育委員会2016
- 『村下遺跡Ⅳ』—L地点の調査—大野城市文化財調査報告書第165集 大野城市教育委員会2018
- 『村下遺跡Ⅴ』—M地点の調査—大野城市文化財調査報告書第161集 大野城市教育委員会2018

第IV章. —G地点—

1. 調査概要

当遺跡は大野城市筒井1丁目746-1、747-2に所在する。標高約16.0m前後の御笠川西岸の沖積微高地に立地している。調査地は宅地にあたり、共同住宅建設等に伴う発掘調査で、調査面積は約155㎡である。本調査は林が担当し、平成13年7月17日より表土除去を開始し、遺構検出、遺構掘削、写真撮影、測量等を実施し、平成13年8月16日に現地の埋め戻しをもって終了した。

本調査で検出した遺構は溝4条、不明遺構6基、ピット等を確認した。遺物は弥生土器・土師器・土師質土器・中国銭などが出土した。



第9図 G地点遺構略測図 (1/200)

2. 遺構と遺物

(1) 溝跡 (第9、10図、図版3、4)

SD01

調査区の南西隅に位置する。検出長約3.50m、幅0.25～0.45m、深さ0.02～0.18mを測る。埋土は単層で、断面形状はU字状を呈している。

出土遺物は、土師器である。小片のため図化できなかった。

SD02 (第9、10図、図版3)

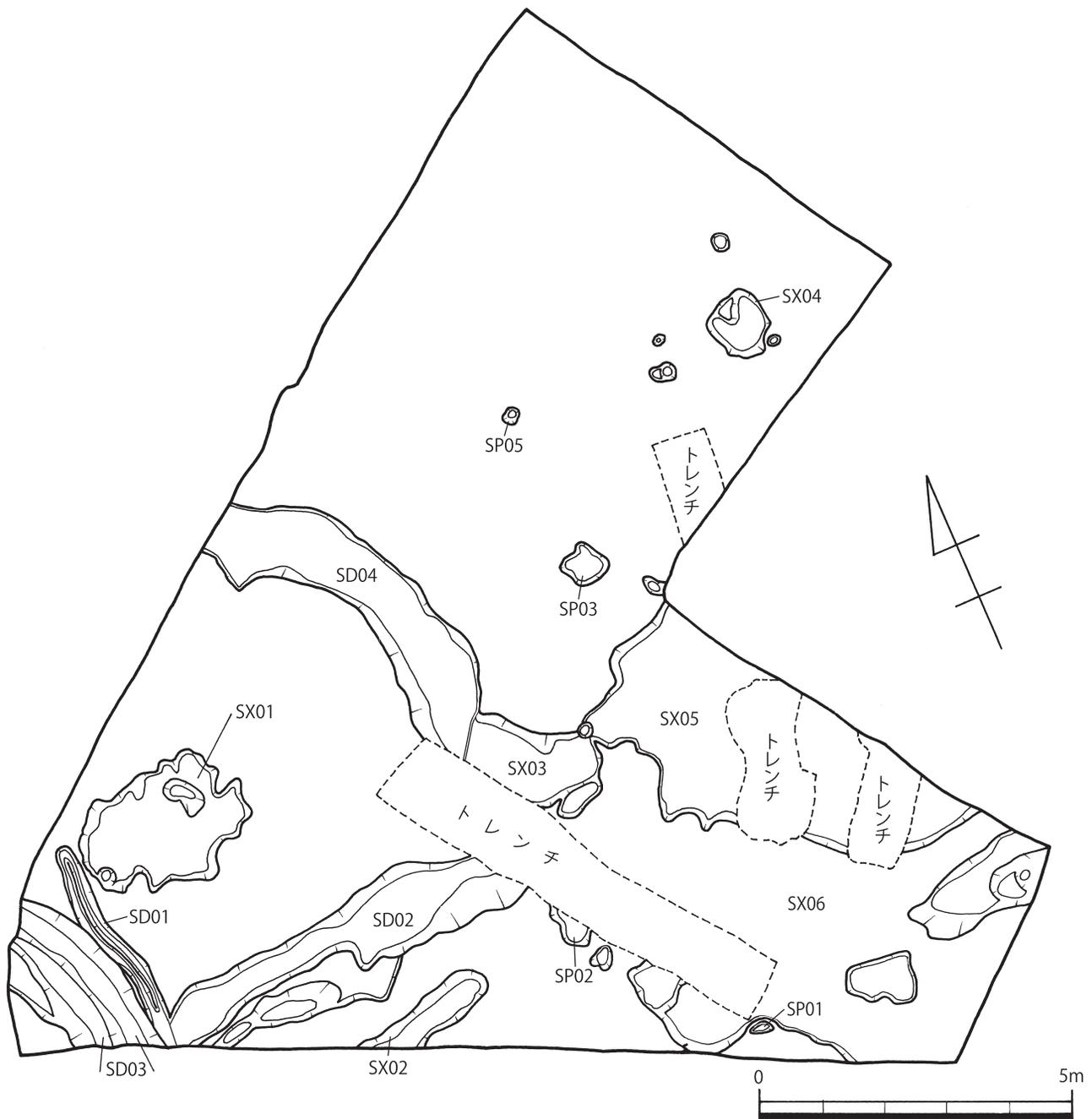
調査区の南西側に位置し、西側はSD01にて切られ、東端は試掘トレンチによって失われている。検出長約6.00m 幅1.04～1.62m、深さ0.07～0.35mを測る。埋土は単層で、断面形状は逆台形状を呈している。

出土遺物は、弥生土器である。小片のため図化できなかった。

SD03 (第9、10図、図版3、4)

調査区の南西側に位置し、SD01に切れる。検出長約2.60m 幅1.20～1.60m、深さ0.02～0.13m前後を測る。埋土は単層で、断面形状は逆台形状を呈している。

出土遺物は、皆無である。



第10図 G地点遺構配置図 (1/100)

SD04 (第9、10図 図版3)

調査区の中央付近に位置し、SX03に切られる。検出長約7.15m 幅0.88～1.30m、深さ0.05～0.16mを測る。埋土は単層で、断面形状は逆台形状を呈している。

出土遺物は、皆無である。

(2) 不明遺構

SX01 (第9～11図 図版3、4)

調査区の南西側に位置する。不定形な形状を呈し、検出長約2.85×2.10m、深さ0.04～0.11m前後を測る。遺構は、黒褐色系の埋土で覆われ、断面形状は、なだらかな逆台形状を呈している。この土坑跡の中央より北側に径60cm程度のPit状の落ち込みが確認出来るが、先後関係は不明である。

出土遺物は、土師器・中国銭(周通元寶・咸平元寶・元豊通寶)が出土した。土師器は、小片のため図化できなかった。

出土遺物 (第12図、図版6)

銭貨

周通元寶(22) 後周時代に鑄造され

たもので、「周」・「通」・「元」は保存状況が良好であるが、「寶」は銭文字が摩滅している。背面は摩耗が著しいが月文?が描かれる。一部、欠損している。

咸平元寶(23) 北宋時代に鑄造されたもので、銭文字は摩滅している。背面も摩耗が著しい。完形品。

元豊通寶(24) 北宋時代に鑄造されたもので、銭文字は「元」・「豊」は保存状況が良好であるが、「通」・「寶」は銭文字が摩滅している。背面は摩耗が著しい。完形品。

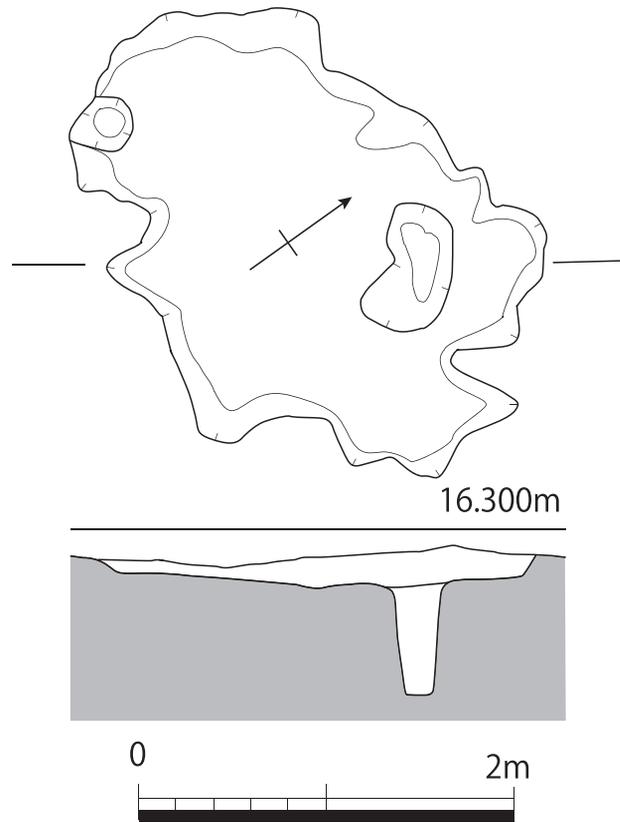
SX02 (第9、10図、図版3)

調査区の南西側に位置し、調査区範囲との関係上、全体把握はできなかった。長楕円形状を呈し、検出長約1.90m、幅0.60m、深さ0.02～0.11m前後の浅い落ち込みである。埋土は単層であった。

出土遺物は、弥生土器が出土した。小片のため図化できなかった。

SX03 (第9、10図、図版3)

調査区の中央付近側に位置し、SD04を切る。楕円形状を呈し、約1.70m×1.66m、深さ0.02～0.08m前後の浅い落ち込みである。埋土は単層である。出土遺物は、土師器が出土した。小片



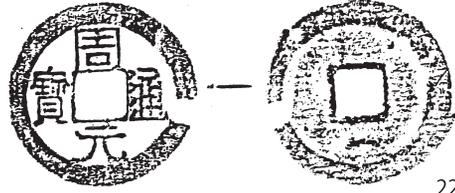
第11図 G地点SX01実測図(1/40)

のため図化できなかった。

S X 04 (第9、10図、図版3)

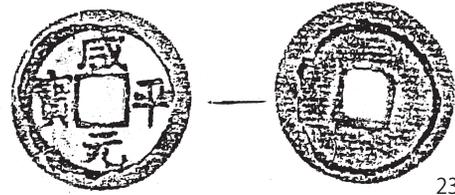
調査区の北側に位置する。円形状を呈し、約1.10m×1.05m、深さ0.04～0.07m前後の浅い落ち込みである。埋土は単層である。

出土遺物は、土師器が出土した。小片のため図化できなかった。



S X 05 (第9、10図、図版3)

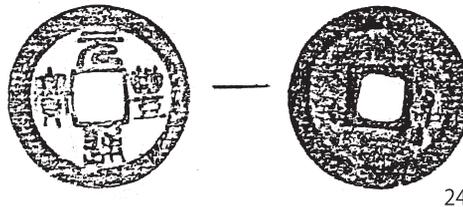
調査区の中央付近に位置する。また、北東側は調査区外に続く。不定形な形状を呈し、現状で長軸6.00m、深さ0.04～0.07m前後の浅い落ち込みである。埋土は単層であった。



出土遺物は、弥生土器・土師器が出土した。小片のため図化できなかった。

S X 06 (第9、10図、図版3)

調査区の東側に位置する。不定形な形状を呈し、最大約7.40m×4.30m、深さ0.02～0.11m前後の浅い落ち込みである。埋土は単層である。



出土遺物は、弥生土器・土師器が出土した。



第12図 G地点SX01出土銭貨拓本(原寸)

出土遺物 (第13図)

弥生土器

壺(25) 埋土中から出土した体部の資料である。

体部には1条の突帯の断面台形状の突帯を貼り付けている。内外面は磨滅のため調整不明である。

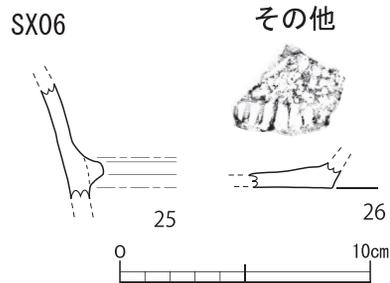
その他の出土遺物 (第13図、図版6)

遺構内から若干の出土遺物が認められたが、小片が多く図化できなかった。そのため、遺構外からではあるが出土した遺物を掲載する。

土師質土器

播鉢(26) カクランから出土した底部の資料である。

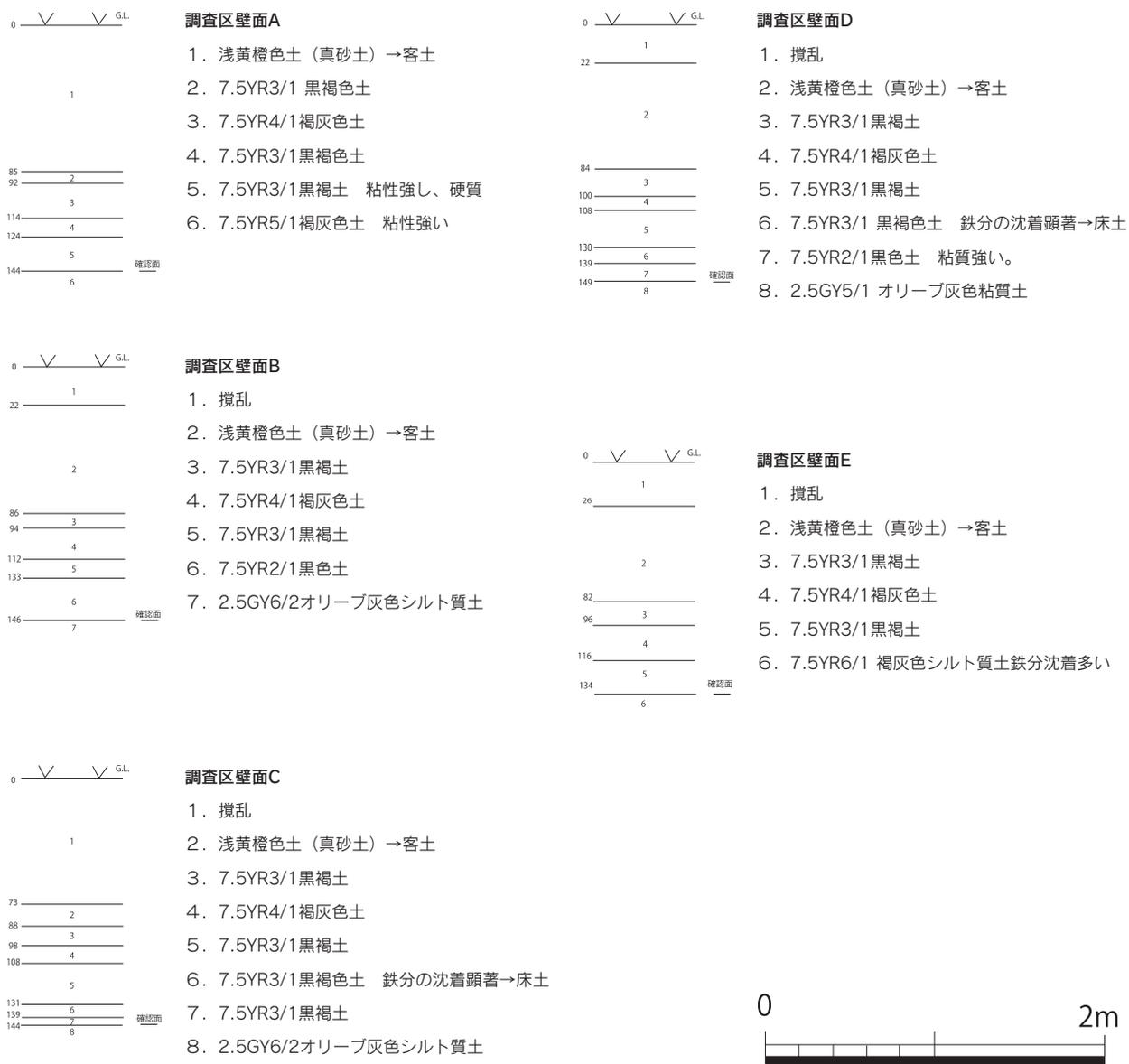
内面には6条の擦り目が確認できる。外面は磨滅のため調整不明である。



第13図 G地点SX06・その他の出土遺物実測図(1/3)

(3) 調査区壁面層序 (第14図)

村下遺跡は御笠川左岸の沖積地に立地している。遺構面は粘土質～シルト質土で形成され、色調も地点ごとに若干異なっている。今回、調査区の各壁面の5箇所に基本層序を作成した(測定箇所は第9図参照)。



第14図 調査区壁面層序A～E地点 (1/40)

3. 小結

今回の調査で判明した所見は以下のとおりである。

遺構の主体は溝や不明遺構、Pitである。検出された4条の溝は、方向も統一されておらず、何度か掘り直されている状況を確認している。

特記すべき遺構として、SX01が該当する。中国から輸入された3枚の銅銭の出土は、今後の中世「村下」を語る上で重要な手がかりになるだろう。

このように、小さな調査の積み重ねることによって、当時の集落景観を復元できるのか今後の調査に期待したい。



周通元寶
(955年初鑄)

咸平元寶
(988年初鑄)

元豐通寶
(1078年初鑄)

【参考文献】

永井久美男編 1996『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会

真陽社 1995『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

『村下遺跡Ⅰ』—A地点・B地点の調査—大野城市文化財調査報告書第88集 大野城市教育委員会2009

『村下遺跡Ⅱ』—C地点の調査—大野城市文化財調査報告書第91集 大野城市教育委員会2010

『村下遺跡Ⅲ』—K地点調査—大野城市文化財調査報告書第141集 大野城市教育委員会2016

『村下遺跡4』—L地点の調査—大野城市文化財調査報告書第165集 大野城市教育委員会2018

『村下遺跡5』—M地点の調査—大野城市文化財調査報告書第161集 大野城市教育委員会2018

第V章. まとめ

1. E地点の並列溝について

村下遺跡—E地点—（以下、E地点）で検出した溝3条と前年度報告した村下遺跡—M地点—（以下、M地点）で検出した溝2条の関係性について考えてみたい。

まず、E地点で検出した3条の溝（SD01～SD03）について、検出された3本の溝は平行している点や直線的にのびることから意図的なものであると考えている。

平成28年度調査を実施したM地点の調査（註1）において、北西から南西方向に延びる2条の溝（SD01・SD03）を検出している。E地点との位置関係は、道路を挟んだ数十m先と隣接している（図1・図15参照）。

上記の溝は、ほぼ同一方向という特徴を有することから偶然の一致とはみなしがたい。そこで、両遺跡で検出された溝の想定される対応は、E地点SD02とM地点SD01とE地点SD03とM地点SD03となる。

まず、両遺跡から検出された溝の類似点を列举すると、E地点SD03とM地点SD03は、溝の幅や断面形状について、類似性が顕著に認められる。また、E地点SD02とM地点SD01下段部分についても、同様な溝の幅や断面形状の類似性が顕著に認められる。さらに両遺跡の共通点として、いずれの地点も並列溝に挟まれた空間上に明らかな遺構が見られず、遺構密度も希薄、同時期の遺構少ないことが挙げられる。

このような並列溝に関して、久住氏（註2）が論文の中で触れている。簡潔にまとめると、一定の幅を直線的に溝が並列している点、並列溝の内、基本的に同時時期に遺構が極めて少ない空地である点を指摘しており、上記のような特徴がE地点及びM地点で確認されている。

また、古代・中世の道路状遺構と考えた場合、山村氏（註3）が論文の中で、道路認定に関して必要条件と充分条件を提示している。必要条件として、基本的にその空間には空間の使用された同時期の遺構が存在しない点、一定距離において2地点以上で存在が確認されている部分がE地点とM地点で認められる。また、充分条件として重要な道路の認定に関して、硬化面や路面の存在について提示しているが、E地点とM地点両方とも、その存在は確認されていない。

そのため、道路的な要素に関しては、充分条件に満たしていない状況であることが確認された。詳細については、久住氏（註2）・山村氏（註3）に論文を参照されたい。

そこで並列溝を二重環濠であったと想定して考えてみたい。仮に遺構面が大きく削平されていると考えても、溝の幅が狭いことや堆積状況から土塁など確認されていない。環濠であれば、地形に則して曲線状に掘削される場合や、広範囲を円形状や弧状に囲むと考えられるが、両地点で検出した溝は、同一方向で直線的に延びる特徴があり、環濠とは明らかに相違がみられる。そのため、環濠とは考えにくい。

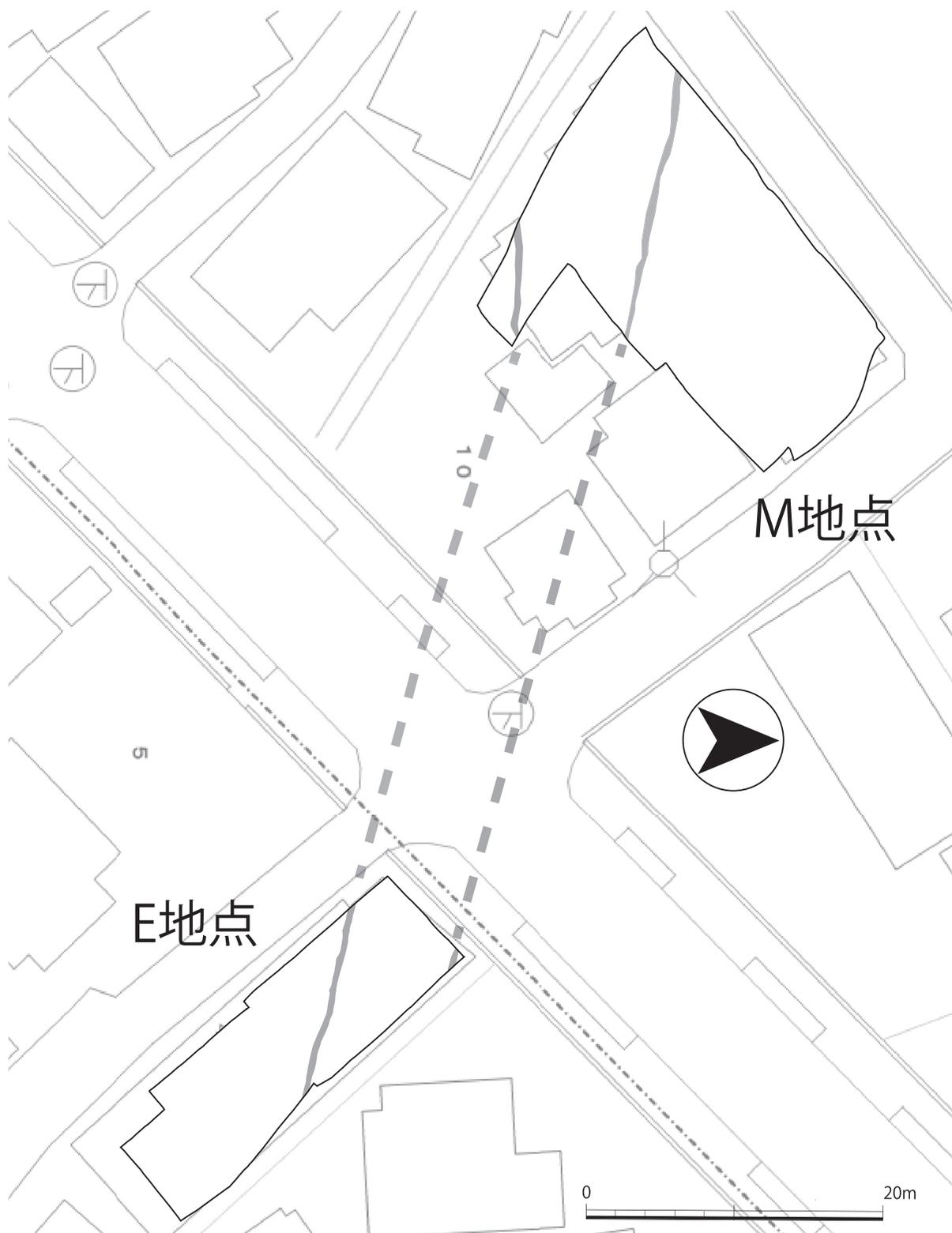
この並列溝が一体何であるのか、当時の情勢、社会環境と深く関係していると思われる。防御な

のか、自然地形を利用した排水なのか、周囲との境界明示をする区画などか様々な解釈は可能である。

詳細は報告書の刊行に委ねるが、隣接する I 地点（註 4）で自然流路及び幾つかの溝が南北に延びている状況が伺えることなどから、現段階の解釈として、遺跡の立地が低地であること、この並列溝が集落の形成に対して強い規制を意識したのではなく、遺跡の立地や地盤の土質など総合的に考慮すると、灌漑などに伴う排水機能維持に重点が置かれた溝ではないか推測される。

上記でも述べた I 地点（註 4）では、多数の溝が確認されており、そのうち、数条の溝は弥生中期に該当すると担当者は所見を述べている。村下遺跡が包蔵する「筒井地区」は既に宅地化されており、旧地形の復元や広範囲の調査が難しい状況となりつつあるが、継続的な調査によって、次第にその姿が明らかになることが期待したい。

なお、図15で示した遺構配置図に関しては、E地点は国土座標系に合わせた調査を行っていなかったため、正確な位置ではない。並列溝の総距離は、E地点→未調査部分（道路）→M地点を経由して、凡そ60m程になる。



第15図 E地点・M地点位置関係図 (1/400)

【註】

- 註1 『村下遺跡5』—M地点の調査—大野城市文化財調査報告書第161集 大野城市教育委員会2018
- 註2 久住猛雄 (1999) 「弥生時代終末「道路」の検出」『九州考古学74号』九州考古学
- 註3 山村信榮 (1993) 「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学68号』九州考古学
- 註4 『村下遺跡—I地点—』未報告

【参考文献】

- 『村下遺跡5』—M地点の調査—大野城市文化財調査報告書第161集 大野城市教育委員会2018

表2 E・G地点 出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※()は復元 ()は残存値	形態、技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	弥生土器	甕	SD02上層 (褐色土)	② (1.7)	磨滅のため、内外面とも調整不明。	A: 0.3mm以下の白色砂粒・長石粒を多量含む。 B: 良好 C: 内外共 橙5YR7/6	
2	弥生土器	甕	SD02上層 (褐色土)	② (2.4)	磨滅のため、内面は調整不明。外面の一部は、ナデ調整。	A: 0.5～3mm程の白色粒子・石英を微量含む。 B: 良好 C: 内外共 にぶい橙7.5YR7/4	
3	弥生土器	甕	SD02上層 (褐色土)	② (3.1)	磨滅のため、内外面とも調整不明。	A: 0.5～2mm程の白色粒子・長石粒・石英を多量含む B: 良好 C: 内面 明赤褐5YR5/6～にぶい橙7.5YR7/4 外面 橙5YR6/6～にぶい橙7.5YR7/4	
4	弥生土器	甕	SD02上層 (褐色土)	② (2.4)	磨滅が著しいが、内外面ともナデ調整か	A: 0.5～2mm程の砂粒・長石粒・雲母を少量含む。 B: 良好 C: 内面 灰白 10YR8/2 外面 にぶい黄橙10YR7/3	
5	弥生土器	壺	SD02上層 (褐色土)	② (2.9)	外面は丹塗。内面は磨滅のため不明。	A: 0.5～1mm程の白色粒子・長石粒を微量含む。 B: 良好 C: 内面 にぶい橙7.5YR7/3 外面 にぶい赤褐2.5YR4/4	外面は丹塗、瓢形壺？
6	弥生土器	鉢	SD02上層 (褐色土)	② (4.2)	内面はナデ。外面は磨滅のため、調整不明。	A: 1～2mm程の長石粒・石英・雲母を少量含む。 B: 良好 C: 内面 にぶい黄橙10YR7/4 外面 灰黄褐10YR5/2	
7	土師器	甕	SD02上層 (褐色土)	① (15.6) ② (4.3)	口縁端部はナデ。内面はナデ調整。外面は磨滅のため、調整不明。	A: 0.5～2mm程の白色砂粒・長石粒・雲母を多量含む。 B: 良好 C: 内面 にぶい橙7.5YR7/3 外面 にぶい橙7.5YR7/3～にぶい赤褐2.5YR4/4	
8	弥生土器	甕	SD02下層	② (3.0)	外面はハケ目。内面は磨滅のため、調整不明。	A: 0.5～3mm程の白色砂粒・長石粒・雲母を少量含む。 B: 良好 C: 内外共 にぶい橙7.5YR7/6～にぶい褐7.5YR5/4	
9	弥生土器	壺	SD02下層	② (2.5) ③ (11.0)	磨滅のため、内外面とも調整不明。	A: 0.5～1mmの白色粒子・石英・雲母を多量含む。 B: 良好 C: 内外共 明赤褐5YR5/6	
10	弥生土器	蓋	SD02下層 (黒色土)	② (4.9)	外面はハケ目。内面はナデ調整か	A: 1～2mm以下の白色粒子・長石粒・雲母を多量含む。 B: 良好 C: 内外共 にぶい橙7.5YR7/3～橙5YR6/8	つまみ径 5.6cm
11	弥生土器	甕	SX03埋土	② (5.0)	外面はハケ目。内面は磨滅のため、調整不明。	A: 0.5～1mm程の白色砂粒・長石粒・雲母を多量含む。 B: 良好 C: 内面 にぶい赤褐5YR4/5 外面 明褐灰7.5YR7/2	
12	須恵器	蓋	SX05埋土	② (1.3)	内外面とも回転ナデ。	A: 0.5mm以下の白色粒子を微量含む。 B: 良好 C: 内外共 N6/灰	
13	弥生土器	甕	SX08 (上層)	② (2.7) ③ (9.0)	外面にはハケ目。内面は磨滅のため、調整不明。	A: 0.5～1mm程の白色砂粒・長石粒・雲母を多量含む。 B: 良好 C: 内面 にぶい黄橙10YR7/3～10YR3/3暗褐 外面 にぶい黄橙10YR6/3	内面は煤が付着する。
14	弥生土器	甕	SX08 (上層)	② (2.3) ③ (8.0)	内面はナデか。外面はハケ目。	A: 0.5～1mm以下の白色粒子を微量含む。 B: 良好 C: 内面 浅黄橙10YR8/4 外面 浅黄橙10YR8/3～褐灰10YR4/1	
15	弥生土器	甕	SX08 (上層)	① (22.0) ② (7.6)	口縁部はヨコナデ。外面はハケ目。内面は磨滅のため、調整不明。	A: 0.5～3mm以下の白色粒子・長石粒を少量含む。 B: 良好 C: 内面 浅黄橙10YR8/4 外面 浅黄橙10YR8/3～褐灰10YR4/1	外面に煤が付着する。
16	弥生土器	甕	SX08 (上層)	① (32.0) ② (4.5)	口縁部はヨコナデ。外面はハケ目。内面は磨滅のため、調整不明。	A: 0.5～3mm以下の白色粒子・長石粒を多量含む。雲母を微量含む。 B: 良好 C: 内面 にぶい橙5YR7/4 外面 橙5YR7/4	
17	弥生土器	甕	SX08 (No.3)	① (30.0) ② (5.1)	磨滅のため、内外面とも調整不明。	A: 1mm程度の白色砂粒を多量含む。1mm程度の長石粒を少量含む。 B: 良好 C: 内外共 橙5YR6/8～にぶい橙5YR7/4	端面部に刻目が5本確認できる。
18	弥生土器	壺	SX08 (上層)	② (5.3)	体部外面は、ハケ目。内面は指オサエが残る。	A: 1mm程度の白色砂粒・長石粒を少量含む。 B: 良好 C: 内外共 にぶい黄橙7.5YR7/4	
19	弥生土器	壺	SX08 (No.1)	② (2.55)	外面は丹塗。内面は指オサエ後ナデ調整。	A: 1mm程度の白色砂粒・長石粒を少量含む。 B: 良好 C: 内面 褐灰7.5YR6/1～灰白7.5YR8/1 外面 にぶい橙7.5YR7/4～暗赤褐10YR3/6	口縁部～外面に丹塗。無頭壺。
20	弥生土器	壺	SX08 (No.4)	① (12.0) ② (12.4)	外面は不定方向のハケ目。内面はナデ調整。	A: 0.5mm程度の白色砂粒・長石粒を微量含む。 B: 良好 C: 内面 淡橙5YR8/3～橙5YR6/6 外面 明褐灰7.5YR7/2	内面に丹塗が一部残る。
21	土師器	小皿	遺構検出時	② (2.3) ③ (8.0)	磨滅のため、内外面とも調整不明。	A: 0.5mm以下の白色砂粒を微量含む。 B: 良好 C: 内外共 灰白10YR4/1	
22	銅製品	銭貨	SX01	長2.4 幅2.4 厚0.1 重2.4g	—	A: — B: — C: —	周通元寶。一部欠損。
23	銅製品	銭貨	SX01	長2.4 幅2.4 厚0.1 重3.3g	—	A: — B: — C: —	咸平元寶。完形。
24	銅製品	銭貨	SX01	長2.4 幅2.4 厚0.1 重3.4g	—	A: — B: — C: —	元豐通寶。完形。
25	弥生土器	壺	SX06埋土	② (4.0)	磨滅のため、内外面とも調整不明。	A: 0.5～1mm程の白色粒子・長石粒を多量含む。 B: 良好 C: 内外共 にぶい黄橙10YR7/3	
26	土師質土器	播鉢	カクラン	② (1.0)	磨滅のため、内外面とも調整不明。	A: 0.5～1mm程の白色砂粒を微量含む。 B: 良好 C: 内面 にぶい黄橙10YR7/4 外面 黒褐5YR3/2	内面に6条の播目が確認できる。

表3 E・G地点 遺構総覧表

E地点 遺構総覧表

遺構番号	遺構	出土遺物	時期
SD01	溝	—	—
SD02	溝	弥生土器（丹塗含む）・土師器	弥生～古墳
SD03	溝	—	—
SX01	不明遺構	—	—
SX02	不明遺構	土師器	古墳以降～
SX03	不明遺構	弥生土器・土師器	弥生～古墳
SX04	不明遺構	弥生土器・須恵器	弥生～古墳
SX05	不明遺構	弥生土器・土師器	弥生～古墳
SX06	不明遺構	欠番	—
SX07	不明遺構	弥生土器・須恵器・陶磁器（龍泉）・土師器	古墳～中世
SX08	不明遺構	弥生土器（丹塗含む）・土師器	弥生
SP01	ピット	弥生土器・須恵器	弥生～古墳
SP02	ピット	土師器	古墳以降～

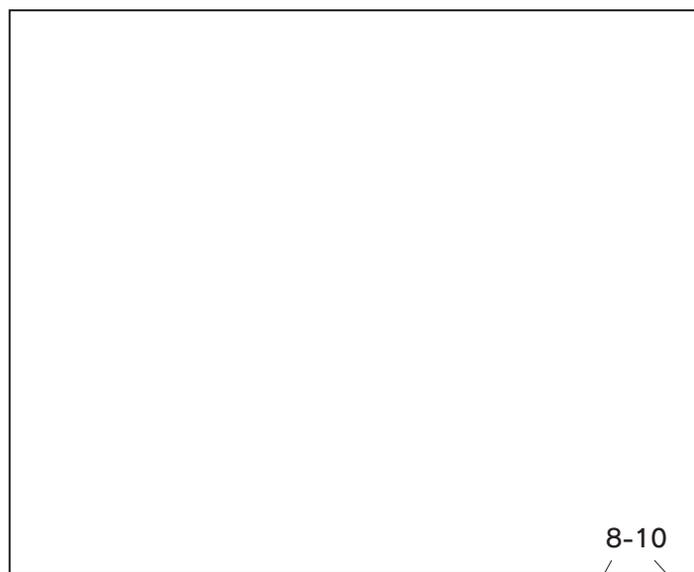
G地点 遺構総覧表

遺構番号	遺構	出土遺物	時期
SD01	溝	土師器	中世以降～
SD02	溝	弥生土器	弥生
SD03	溝	—	—
SD04	溝	—	—
SX01	不明遺構	土師器・中国銭	中世以降～
SX02	不明遺構	弥生土器	弥生
SX03	不明遺構	土師器・土師器（小皿）	古墳～中世
SX04	不明遺構	土師器	古墳以降～
SX05	不明遺構	弥生土器・土師器	弥生～古墳
SX06	不明遺構	弥生土器・土師器	弥生～古墳
SP01	ピット	土師器	古墳以降～
SP02	ピット	土師器	古墳以降～
SP03	ピット	—	—
SP04	ピット	欠番	—
SP05	ピット	—	—

写真図版

凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



8-10

挿図番号 遺物番号



①E地点調査区北側全景（南東から）



②E地点調査区南側全景（北東から）



①E地点SD01完掘
(南東から)



②E地点SD02完掘
(南東から)



③E地点SX08完掘
(南から)



①G地点調査区全景（南東から）



②G地点調査区全景（北西から）



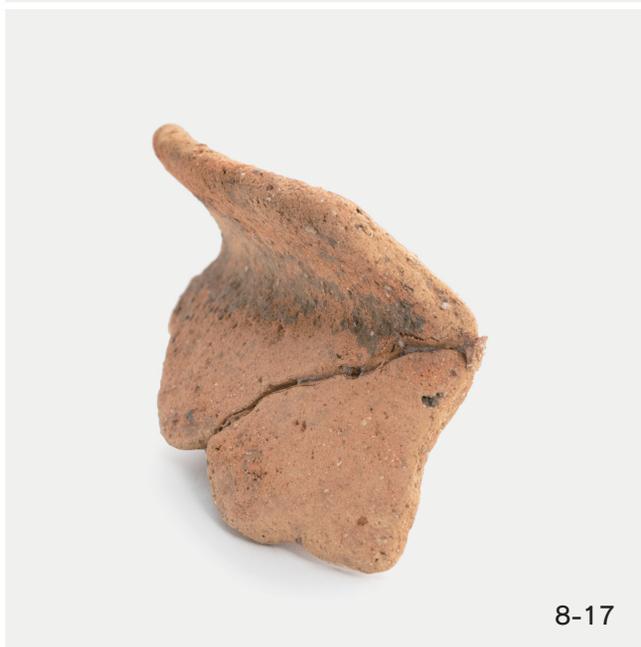
①G地点SX01完掘
(南東から)

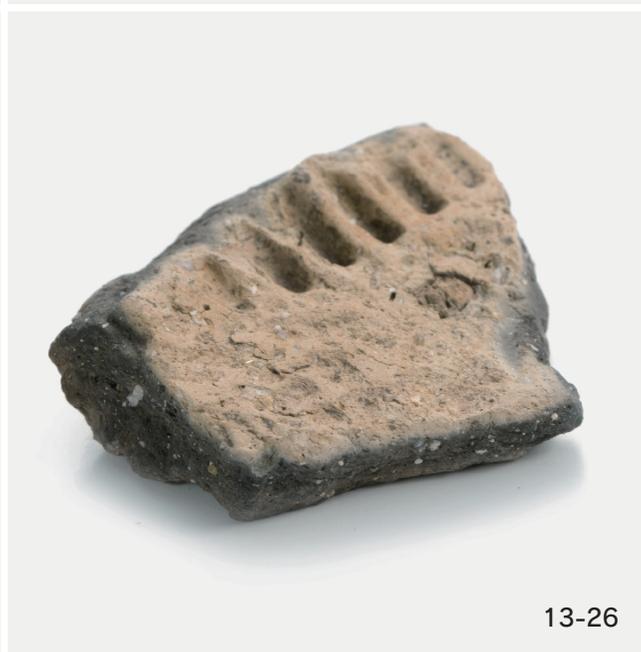
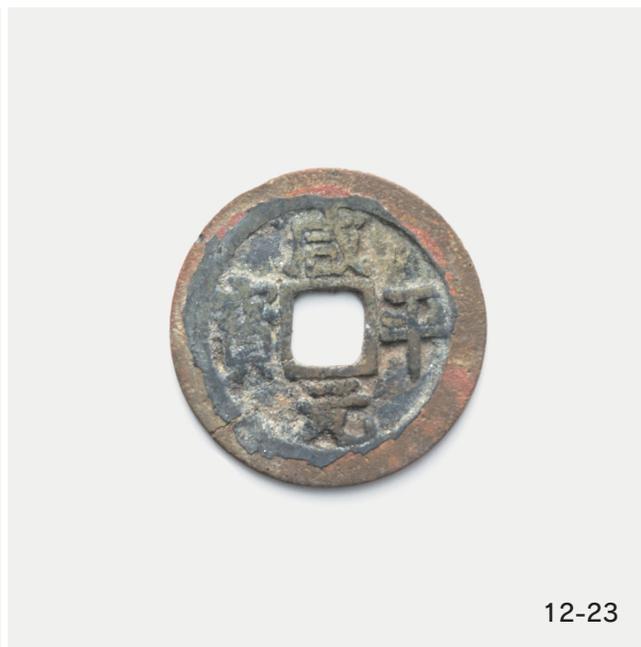


②G地点SX01銭貨出土
状況 (南東から)



③G地点 SD01・SD03
完掘 (南東から)





報告書抄録

ふりがな	むらしたいせきろく
書名	村下遺跡6
副書名	E・G地点の調査
巻次	6
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第172集
編著者名	柴田 剛
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 TEL092-501-2211
発行年月日	平成31年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むらしたいせき 村下遺跡 ちてんちょうさ E地点調査	ふくおかけんおおのじょうしつちい ちょうめ 福岡県大野城市筒井2丁目 490-1	402192		33° 32' 30"	130° 28' 36"	1996年 5月7日 ～ 1996年 5月29日	約300㎡	事務所 建設

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
むらしたいせき 村下遺跡 ちてんちょうさ E地点調査	集落跡	弥生	溝・不明遺構・ 小穴	弥生土器・須恵器 土師器・陶磁器	

要約 村下遺跡は、標高16.5m前後の御笠川西岸の沖積地に位置する。今回の調査では、弥生時代の溝3条が並列で検出された他、不明遺構8基や小穴が検出され、集落縁辺の様相が確認された。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むらしたいせき 村下遺跡 ちてんちょうさ G地点調査	ふくおかけんおおのじょうしつちい ちょうめ 福岡県大野城市筒井1丁目 746-1、747-2	402192		33° 32' 29"	130° 28' 32"	2001年 7月17日 ～ 2001年 8月16日	約155㎡	共同住宅 建設

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
むらしたいせき 村下遺跡 ちてんちょうさ G地点調査	集落跡	中世	溝・土坑・小穴	弥生土器・土師器 土師質土器・中国銭	中国銭「周通元寶」、「咸平元寶」 「元豊通寶」の3枚が出土した。

要約 村下遺跡は、標高16.0m程の御笠川西岸の沖積地に位置する。今回の調査では、溝4条、不明遺構6基、小穴が検された。S X01から中国銭3枚が出土している。当該期における遺構の展開を語る上で重要な手掛となった。

村下遺跡 6

－ E・G地点の調査－

大野城市文化財調査報告書 第172集

平成31年 3月29日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社

〒848-0035 伊万里市二里町大里乙3617-5